

# 高等特別支援学校における軽度知的障害児に 対する自立活動の指導の充実

——「生徒参画型教材」の開発と自立活動の「流れ図」の活用を通して——

宜野座雄<sup>\*1</sup> 平良錦一郎<sup>\*2</sup> 志良堂弥<sup>\*3</sup> 砂川達也<sup>\*3</sup>  
来間加代子<sup>\*3</sup> 真喜屋頼子<sup>\*4</sup> 与儀俊介<sup>\*4</sup> 具志えり奈<sup>\*4</sup>

キーワード 自立活動 個別の指導計画 自立活動の目標・内容 6区分 27項目  
「流れ図」 個に応じた指導 個別最適な学び 生徒参画型教材  
高等特別支援学校 軽度知的障害 令和の日本型学校教育

## I はじめに

令和3年1月26日の中央教育審議会答申においては、2020年代を通じて目指すべき「令和の日本型学校教育」の姿として「全ての子供のたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」が示された。「個別最適な学び」とは、これまでも重視されてきた「個に応じた指導」を学習者の視点から整理した概念である。一方、特別支援教育においては、従前より各教科・領域等における「個に応じた指導」が前提として行われてきた。特別支援教育における「個に応じた指導」とは個別学習のみを指すのではなく、集団で学ぶ場合においても個別の指導計画に基づく個に応じた指導・支援を実施することを指している。その「個に応じた指導」の象徴的な指導領域として、特別支援学校や特別支援学級等の教育課程において特別に設けられる自立活動がある。

自立活動は、個々の幼児児童生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培うものである。自立活動の大きな特徴としては、学習指導要領に示される「内容」の取り扱いがある。自立活動は、系統的な内容を順に取り扱う各教科とは異なり、内容として示される項目の中から個々の実態に応じて必要な項目を教師が選定し、それらを関連付けて指導を行う。個別の指導を基本とし、実態把握から具体的な指導に至る流れについては『特別支援学校学習指導要領解説自立活動編（平成30年3月）』（以下、『指導要領解説』）に「流れ図」として例示されている。この「流れ図」を活用することで、自立活動の目標・内容に基づく着実な指導及び多面的な実態把握等による個に応じた指導の充実が期待できる。一方で、教師に委ねられる裁量の大きさゆえ、自立活動の目標・内容に基づかない根拠が不明瞭な指導や教科学習との混同が散見されるなど、様々な課題も指摘されている。

高等特別支援学校（以下、高支）とは、高等部のみ設置されている特別支援学校のことである。沖縄県には、単独設置1校と高等学校に併設された4校の合計5校がある。軽度の知的障害を対象とし、将来の職業的・社会的自立を見据えた教育課程が編成されている。また、知的障害の程度が軽度であるため、他の特別支援学校と比べて生徒数に対する職員の配置が少なく、一斉授業を主としていることも特徴である。

令和5年度に本総合教育センターが高支1校で実施した自立活動についての出前研修では、研修後のアンケートから「自立活動の大切さはわかっているがなかなか実践できていない」「課題の違う生徒達の自立活動をどう進めてよいか悩んでいる」「軽度の知的障害児の実践事例が知りたい」等、自立活動の指導に苦慮している様子がうかがえた。また、令和6年度実施の特別支援学校部主事研修会では、協議やアンケートにおいて、各高支の部主事からも同様の悩みが聞かれた。これらの高支における自立活動の指導の課題の要因として、個別指導体制を確保する難しさや「流れ図」の未活用、軽度知的障害児の自立活動の事例の少なさなど、高支特有の事情が背景にあると推察された。

三浦光哉(2020)や志鎌知弘(2021)は、自立活動の個別の指導計画の作成に本人が参画することを提唱している。志鎌は「生徒の捉えた自分の目標を受けて、教師が学習計画や内容を具体的に設定・提案することで、生徒は納得して意欲的に取り組み、その結果満足度がより高まるのではないかと考える」と述べて

<sup>\*1</sup> 沖縄県立総合教育センター指導主事

<sup>\*2</sup> 沖縄県立総合教育センター主任指導主事

<sup>\*3</sup> 沖縄県立総合教育センター研究主事

<sup>\*4</sup> 沖縄県立中部農林高等支援学校教諭

いる。三浦は「本人が自立活動の学習内容を理解したり自分自身の障害を認識したりして、主体的に取り組みながら、障害による学習上又は生活上の困難の主体的な改善・克服に努めるようにすることが重要」としており、生徒が自立活動の内容に沿って自己の課題を考える「本人用の自立活動シート」を考案している。生徒自身が自己理解に基づき自らの学びを調整することで、学習課題の個別化も図られ、高支の課題である個別指導体制の確保にも寄与すると考えられる。また、教師が生徒一人一人の考えをそれぞれの「流れ図」に反映させることで、個に応じた指導が一層充実することも期待できる。

そこで本研究では、主に高支における自立活動の授業を想定し、軽度知的障害の生徒向けの「生徒参画型教材」を開発することとする。生徒参画型教材を活用することで、生徒自身の自己理解の深化や個に応じた指導の充実が期待できる。加えて、高支において今後の活用が期待される「流れ図」を活用することで、生徒の実態を多面的に捉え、適切なプロセスに基づいて指導内容の充実を図っていく。「流れ図」の活用にあたっては、生徒参画型教材を通して引き出された生徒の考えも参考にし、軽度知的障害の生徒を対象とした「流れ図」活用の先行事例として蓄積を図ることで、高支における自立活動の指導の充実を目指していく。

## II 研究内容

### 1 自立活動について

#### (1) 自立活動の内容とその取り扱い

自立活動の内容は、人間としての基本的な行動を遂行するために必要な要素と、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するために必要な要素で構成されており、それらの代表的な要素である27項目が「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の形成」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」の6つの区分に分類・整理されたものである。『特別支援学校 教育要領・学習指導要領（平成29年4月告示）』（以下、『指導要領』）においては、個別の指導計画の作成と内容の取扱いについて「第2に示す内容の中からそれぞれに必要な項目を選定し、それらを相互に関連付け、具体的に指導内容を設定する」と示している。

#### (2) 実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れの例（流れ図）

『指導要領解説』において、個々の幼児児童生徒の実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れの例を「流れ図」として示している（図1）。これは、『指導要領解説』に示される個別の指導計画の作成手順を様式化したもので、流れ図を活用することで個に応じた具体的な指導内容を導き出すことができる。沖縄県<sup>1)</sup>では、令和4年度以降に特別支援学校に在籍する全児童生徒（高等部の一部の教育課程においては令和4年度より年次進行）について「流れ図」に基づく個別の指導計画の作成を規定している。

#### (3) 生徒参画型の自立活動について

『指導要領解説』には「児童生徒の意見を取り入れながら自立活動の学習課題を設定することも、障害に対する認識や自分の得意な面及び不得意な面などに対する認識を促すことになり、自己を肯定的に捉える感情を高めることにつながる」と示されている。

下山直人（2018）は、軽度知的障害のある生徒への自立活動の指導の留意点として「自立活動の目標や内容を本人が意識し、その目標の達成に向けて本人が努力したり、その目標に対する評価に

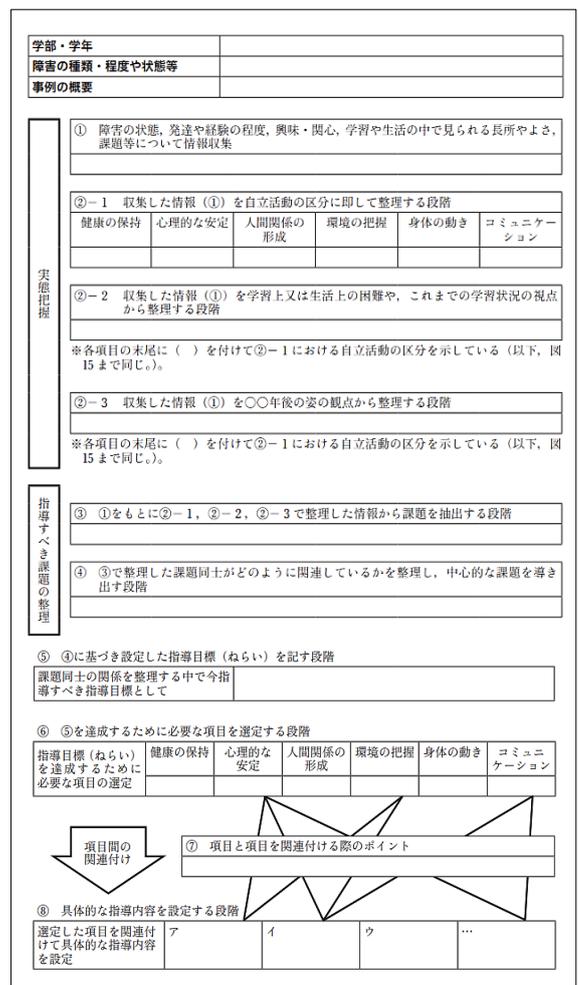


図1 自立活動の「流れ図」

<sup>1)</sup>特別支援教育指導資料集 第43集（令和4年3月 沖縄県教育委員会）第1章Iの3及びIIの17(8)に規定

本人がかかわったり、本人が主体的に参加することが大切である」と述べている。

本研究では、三浦(2020)が考案した「本人用の自立活動シート」も参考にしつつ、生徒が自立活動の目標・内容を意識し、自らも学習計画や評価に参画できるような教材開発を目指すこととする。

## 2 高支等における現状について

### (1) 高支等における軽度知的障害児の自立活動の現状について

令和5年度に高支1校で実施した出前研修では、自立活動についての講義に加え「流れ図」作成の演習(グループワーク)を実施した。各グループで対象生徒を決め、複数の視点で個に応じた自立活動の指導について検討を行った。事後アンケート(回答数16)では以下のような回答があった(表1)。アンケート結果からは「自立活動について理解が深まった」という肯定的な回答が半数を占める一方、高支における自立活動の指導について教師達が苦慮している現状もうかがえた。

表1 出前研修の事後アンケートの記述(抜粋)

<ul style="list-style-type: none"> <li>・自立活動について理解が深まった。複数の視点で検討できてよかった。</li> <li>・このような話し合いを持つことが本当に難しい程多忙で、もっと子供達と向き合いたいと思っている。</li> <li>・自立活動の大切さはわかっているが、実践がなかなかできていないのが現状。</li> <li>・学級の中でもそれぞれ課題の違う生徒が9~10名いて、どのような形で進めていったらよいか悩む。</li> <li>・軽度知的障害の生徒の自立活動の取り組み事例、他校の具体的な取り組みの例をもっと知りたい。</li> </ul>
--

令和6年度実施の特別支援学校部主事研修会においては、高支5校の部主事及び同様の実態の生徒が通う美咲特別支援学校高等部の2分教室の主任から、教科・領域等に関する主な課題として自立活動の指導が挙げられた。具体的な内容としては「実態把握や毎時間の指導内容等、計画立案に苦慮している」「指導と評価に課題がある」という指導全般についての悩みや、「『流れ図』作成の負担や指導に関する共通理解の時間の確保」という物理的な課題への苦慮、「自立活動の時間が機能しているのか悩む」という現状への強い懸念などがあった。また「軽度の知的障害を有する生徒への自立活動に試行錯誤している」「特別支援学校へ初めて勤務する職員や経験の浅い職員が指導方法等について悩んでいる」という意見は、高支等以外の学校の部主事からも聞かれた。

### (2) 協力員所属校における自立活動の現状について

協力員の所属校において、自立活動の授業に関する事前アンケート(教師・生徒)を実施した。

#### ① 教師への事前アンケート

事前アンケートでは、協力員の所属校の全教師(10名)から回答を得ることができた。アンケートは選択式を基本に、選択肢にない内容や具体的な記述が必要な場合は追加で記述できる形式とした。勤務経験等の個人に関する質問を除き、自立活動の指導に関する質問については複数回答とした。自立活動の指導について、4名以上の回答があった項目を以下に抜粋した(表2)。

表2 教師への事前アンケートにて4名以上の回答があった項目(回答者10名、複数回答可)

Q1:これまでの自立活動の指導において、難しいと感じることを全て選んでください。	
「流れ図」や個別の指導計画の作成が難しい	6名
教材・教具の準備や選定が難しい	5名
内容(6区分27項目)については理解しているが、具体的にどのような指導をしてよいかわからない	4名
一人で複数の生徒を受け持つ場合に、指導の個別化を図ることが難しい	4名
Q2:高等特別支援学校の自立活動について、課題と感じることを全て選択してください。	
一人一人の「流れ図」や指導計画をじっくり検討する時間がもてない	5名
少ない教師の数で複数の生徒を指導するため、個別の指導をしづらい(指導の個別化に努めてはいる)	5名
少ない教師の数で複数の生徒を指導するため、全員に向けて同じ内容を一齐指導しがちである	4名
生徒自身が、何を学ぶ時間なのかイメージをもてていない	4名
Q3:本研究では、生徒自身が自立活動の目標・内容について学び、6区分の中から関連させて自分の課題を考え、実際の学習活動に反映させていく予定です。このような、生徒参画の成果として期待される項目を全て選択してください。	
生徒の自己理解が深まる	6名
一人一人の課題に応じた指導内容が設定できる	4名
自立活動の目標・内容に沿った指導ができるようになる	4名
自立活動の目標達成が促される	4名

上記アンケート結果から、次の考察が得られた。

ア 教師側の課題

「流れ図」に関することが特に多く挙げられた。作成に難しさを感じていることや、作成する時間の確保に苦慮している状況が明らかとなった。また、自立活動は、指導目標及び指導内容を個別に設定し指導することが基本であるため、1～2名の教師で10名の生徒を指導する高支においては、指導体制確保の難しさを訴える回答も多かった。この点については、下山(2018)の指摘とも一致しており、指導体制について一層の工夫の必要性が示唆された。

イ 生徒参画型の授業について

生徒の自己理解が深まることへの期待が最も大きく、自立活動の目標・内容に沿った指導の展開や学習課題の個別化についても期待する回答が多かった。

② 生徒への事前アンケート

生徒への事前アンケートは、選択式と記述式で実施した。主な内容としては、自立活動の目的や学習内容に関する認識を問う質問、これまでの学習経験や自己理解等に関する質問を設定した。各学年全生徒10名ずつ計30名から回答を得る予定であったが、一部の生徒が学年の選択を誤ったため、1年生7名、2年生12名、3年生9名の計28名の回答結果となった。実際の在籍と異なる部分はあるが、生徒の声として参考にする。回答の傾向としては、以下のとおりである。

ア 中学までの自立活動の学習経験の有無(選択)と学習内容(記述)

28名中23名が中学までに自立活動の授業を受けたことがあると回答し、残りの5名は「わからない」という回答であった。学習内容としては、「軽作業」や「ゲーム」等の活動が多かったが、「体育」「数学」「漢字や計算」という教科学習の内容も散見された。「わからない」「覚えていない」の回答も8名いた。

イ 自立活動の目的や学習内容について(記述)

1年生については、7名中3名が目的と学習内容の両方に「わからない」と答えた。他の4名については、目的について「将来のため」や「コミュニケーション」等と回答し、漠然としてはいるが自分なりにイメージをもっている様子がうかがえた。学習内容についての回答も同様の傾向であった。

2・3年生の回答では、目的と学習内容のいずれについても、自己理解に関する内容や自己の課題と結びつけた具体的な記述が多く、自立活動の目標を概ね理解している様子がうかがえた。

3 高支における課題解決の方策について

高支の現状を踏まえ、課題と方策について以下に整理した。

(1) 課題

- ① 自立活動の「流れ図」の活用が不十分であると推察され、一部、学習指導要領に示される手続きや自立活動の目標・内容に沿った指導の未実施が懸念された。
- ② 他の特別支援学校と比較して、特に人員配置の面で指導体制確保の困難さが示唆された。自立活動の原則である個に応じた指導を着実に実施するためには、高支の実情並びに生徒の実態を踏まえた指導形態や指導方法を工夫する必要がある。
- ③ 軽度知的障害児に対する自立活動の事例の蓄積と共有について必要性が示唆された。

(2) 方策

- ① 本総合教育センター特別支援教育班(以下、特別支援教育班)で、自立活動の目標・内容を踏まえた生徒参画型の教材を開発する。その教材を活用することで、生徒の自己理解及び主体的な学びを促すとともに、自立活動の目標・内容に基づく個に応じた指導の着実な実施を図る。
- ② 「流れ図」を活用することで、適切な手続きを踏まえた指導内容の充実を図る。また、生徒参画型教材等を活用して生徒の意見や考えを引き出し、「流れ図」作成の参考にする。
- ③ 本研究を通して、軽度知的障害児に対する「流れ図」の活用事例を積み上げる。

4 生徒参画型教材(試案)の作成及び授業における検証について

(1) 自立活動の内容(6区分27項目)に沿った教材(試案)の作成

① 教材作成のねらい

ア 生徒自身が自立活動の目標及び内容について知り、学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服できるようにする。

- イ 生徒自身が自立活動6区分の視点で自己を捉え直すことで、多面的な自己理解を促す。
- ウ 生徒の考えや意見を実態把握や「流れ図」及び個別の指導計画の作成に生かし、個に応じた指導の充実を図る。

② 教材（試案）

協力員による検証においては、所属校の自立活動の授業形態（1コマ20分）に合わせ、20分×5コマの授業を想定して教材を作成した。

ア PowerPointのスライド及び解説入り動画

自立活動の目標と、内容の6区分27項目について学習するスライドを作成した（図2）。各スライドでは、自立活動の目標・内容を生徒が理解しやすい文章に置き換え、ルビ振りやイラスト使用の工夫を行った。さらに、作成したスライドに解説の声吹き込み、動画教材として利用できるようにした。動画は、目標について1本と、内容について2本を作成し、各動画の時間は10分前後とした。当初は目標についてのみ動画を作成していたが、協力員らの意見を受け、内容についての動画も追加で作成した。

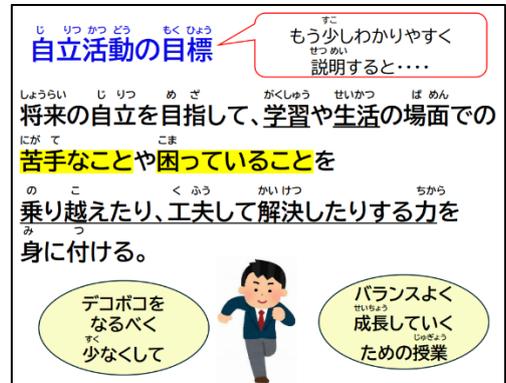


図2 自立活動について学ぶ動画

イ 動画と連動したワークシート

ワークシートは、自立活動の目標（1コマ）・内容（3コマ）、最終回のまとめ（1コマ）に分けて作成した（図3）。

目標のワークシートについては、ねらいの確認と目標の文章の穴埋めとした。

内容のワークシートには、動画のスライドを見ながら自分に必要な学習かどうかをチェックできる様式とした。また、区分ごとに一通りチェックした後は、その区分を振り返り、具体的な課題や取組について考え記入する欄を設けた。



図3 動画と連動したワークシート

まとめのワークシートでは、6区分の学習とワークシートを振り返り、各項目の記述を参考に生徒自身が自立活動の目標を設定する欄を設けた。

(2) 教材を活用した授業実践による検証

- ① 日時 令和6年7月5日、8日、10日、11日、12日 8:55～9:15（20分間）
- ② 対象 中部農林高等支援学校 1年生9名（第5時のみ10名）
- ③ 活動計画（全5回）

時数	学習内容	ねらい
第1時	自立活動の目標について	自立活動の目標について理解する。
第2時 ～第4時	自立活動の内容について	自立活動の内容について知り、自分に必要な学習を考える。
第5時	まとめ	前時までの内容を振り返り、自立活動の目標を立てる。

④ 授業の様子

ア 授業の方法

各授業においては、協力員の教師が動画を再生し、動画の解説に沿って生徒がワークシートを記入する方法とした。通常授業（50分）より短い20分授業での実施であることを考慮し、教師による導入やまとめを省略し、動画を再生するだけで授業ができるよう考慮した。

イ 授業の様子

授業は第1時のみ教師2名によるチーム・ティーチングで行い、残りの4回は学校の事情により1名の教師で実施した。

生徒達は動画をよく視て話を聞いている様子が見られ、動画から流れる解説に沿って自己を

振り返り、ワークシートに記入している様子が見られた。一方、ワークシートに記入する手が止まったり、悩んだりしている生徒も一部いたのので、そのような教師に対しては、教師が言葉かけをする場面が見られた。

ウ ワークシートの記入状況

9名の生徒のワークシートを回収し、記入状況を確認した(表3)。9名中8名の生徒が、区分ごとのまとめに設けた記述欄に、自己の課題を記入することができた。そのうち6名の生徒については、各項目の選択結果にも個々の特徴が見られ、項目の一つ一つについて自分に必要な学習であるのかをよく考えた様子が見られた。その他2名の生徒のうち1名は、全ての項目に「必要な学習」と記入した。対照的に、残り1名の生徒は全項目に対して「必要ない」と記入し、記述欄も全て空白であった。

表3 生徒のワークシートの記入状況(生徒2名分、一部抜粋) ※項目の表記は生徒用に書き換えたもの

項目	○：自分に必要な学習 ×：自分に必要ない ?：質問の意味がわからない 罫線(/)：未回答															各区分の項目について学習した後の 生徒の自由記述(原文のまま)				
	人間関係の形成				環境の把握					身体の動き					コミュニケーション					
	(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)		(2)	(3)	(4)	(5)
生徒A	○	○	×	○	○	△	○	○	×	○	×	○	○	○	×	/	×	×	○	Q:「自分に必要だと思う学習について詳しく書きましょう」  【生徒A】 1(健):生活リズム、生活習慣に関すること 3(人):人の気持ちが分らないと、仕事に人を怒らせてしまうから、(1)と(2)を学びたい。 4(環):たまにぶつかったり、ころんだりすることがあるから 5(身):スムーズに行動する力を身につける学習。 6(コミュ):言葉づかいをよくする学習  【生徒B】 1(健):すいみん不足 2(心):安定している 4(環):新しいかだいをみにつけたいと思ったから 5(身):作業がスムーズになるようにしたい 6(コミュ):相手に伝えきれない時があるので伝えるようにしたい
生徒B	?	○	○	/	/	○	×	○	○	○	×	?	×	○	×	○	○	?	○	

(3) 生徒への事後アンケート

授業実践終了後に、生徒の理解度と取組状況、そして、教材の改善点について事後アンケートを実施し、9名中8名の生徒から回答を得た。

① 自立活動の6区分の理解(図4)

8名中6名の生徒が肯定的に回答したことから、区分については概ね理解できたと考えられる。一方、1名の生徒は「ぜんぜん理解できなかった」と回答している。このような生徒については、アンケート中の他の回答やワークシートの記述内容を確認し要因を分析する必要があるとともに、これらの要因を踏まえ事後の対話的な活動につなげていく必要があると考えられる。

② 自分に必要な学習の検討(図5)

「少しできた」という回答が6名と最多で、「よくできた」と「あまりできなかった」がそれぞれ1名ずつであった。

教材は、生徒自身が自立活動の内容に沿って自己の課題を捉え、必要な学習を考えられるようにすることを目指しているが、最も多い回答が「少しできた」であることを鑑みると、文言の表現や時間配分等については、実態に即した改善の必要性が示唆された。

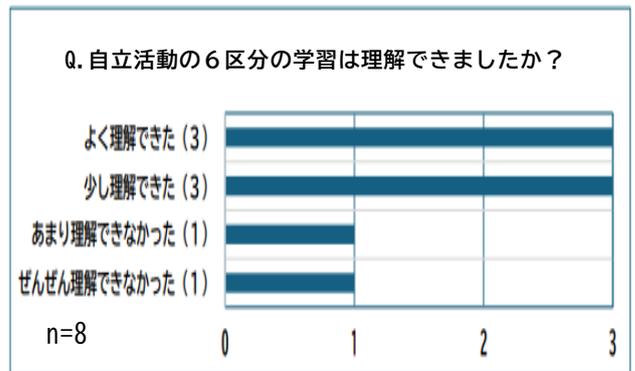


図4 自立活動の6区分の理解

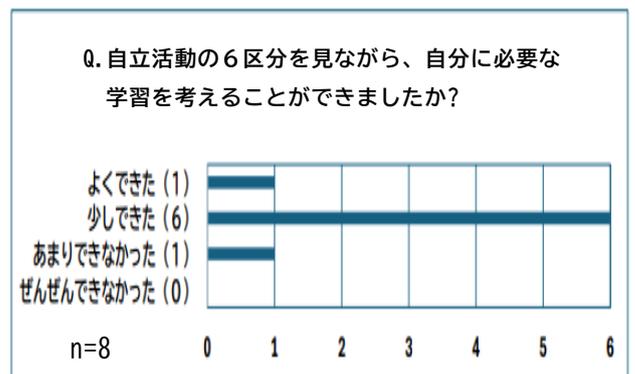


図5 自分に必要な学習について

③ 教材の改善点（図6）

複数回答で9件の回答が選択された。「その他」と回答した生徒はいなかった。「もっとゆっくり考える時間があるとよい」が最も多く（4名）、文言を短くすることや考える量を減らすことについても2名ずつ回答があった。図5の質問項目での改善点同様、文言の表現や時間配分等について、改善の必要性が示された。

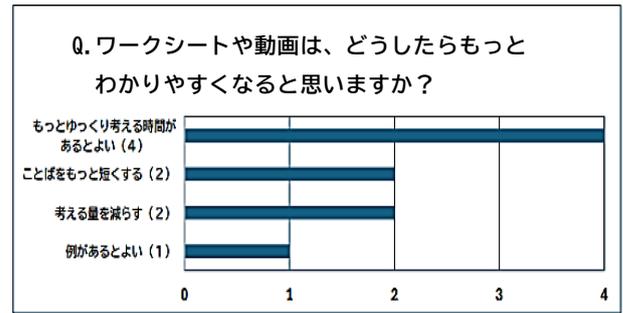


図6 教材の改善点について（複数回答）

(4) 考察

① 教材（試案）の効果

- ア 生徒自身が自立活動の目標を理解し、自立活動の内容に沿って自己の課題を考えることができた。このことが、自立活動の指導における生徒の自己選択・自己決定の機会の土台となり、生徒参画による主体的な学びへとつながることが期待できる。
- イ 6区分の視点から引き出した生徒たちの考えや意見は「流れ図」作成の参考となり得るものであり、個に応じた指導や指導内容の充実につながることを期待できる。

② 改善点

- ア 1コマの授業で10分程度の動画を使用した。20分授業の分量としては情報量及び作業量が多く、生徒がじっくり考える時間を確保できなかった。
- イ 授業中の様子からは、生徒が6区分 27項目全てに対してチェックをすることに疲労感を感じている印象があった。ワークシートの記述やアンケート結果も踏まえ、作業量と時間設定の関連や全項目をチェックさせる必要性の有無等について検討が必要である。
- ウ 生徒の負担を減らすために複数の項目をまとめて表記する場合、まとめることで項目の趣旨から逸脱する恐れもあるため、一つ一つの項目の趣旨を慎重に確認する必要がある。
- エ ア～ウを踏まえつつ、教材に使う文言や表現についても実態に応じて改良する必要がある。

(5) 教材の改善

検証結果を受けて、特別支援教育班において教材の改善点について協議し、表4の方向性で改善を図ることとした。令和6年度内で改善を終え、今後の研究や教育実践等に活用予定である。

表4 「生徒参画型教材」の改善の方向性

1 教材について
・各区分・項目の説明については、学習指導要領解説を踏まえつつ、再度、生徒にとってよりわかりやすい表現を追求する。
・本総合教育センターとしては、6区分27項目全てについての教材を作成する。活用方法については、次の2に示す内容の資料を提供し、趣旨に沿った適切な活用ができるようにする。
2 学校での活用に必要な資料の追加作成について
・各学校の教育課程や児童生徒の実態等に応じて効果的に活用できるよう、指導計画や指導案の例を示す。また、教材を活用した定期的な自己評価や対話的な活動についても具体例を示す。
・各学校の実情に合わせて活用しやすいよう、教材の動画やスライド資料は1区分ずつ分割して利用できるようにする。

5 「流れ図」の活用について

(1) 出前研修を通じた「流れ図」活用の演習

- ① 日時 令和6年9月4日（水） 16:00～17:00（60分間）
- ② 場所 県立中部農林高等支援学校
- ③ 講師 特別支援教育班

主任指導主事 平良 錦一郎 研究主事 来間 加代子 指導主事 宜野座 雄

④ 演習の方法

教頭、養護教諭を含む職員11名を3～4名ずつ3つのグループに分け、各グループ1名の生徒を対象（合計3名）に「流れ図」の活用演習を行った。「流れ図」の各段階（表5）に沿って各々が意見を出し、付箋に書いて分類・整理しながら協議を進めた。協議の際の参考として、「生徒参画型教材」に記入された生徒の記述等も「流れ図」に追記した（表7・表8参照）。

表5 「流れ図」に示される段階（実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの例）

段階①	「実態や情報」：障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所やよさ、課題等についての情報収集
段階②-1	「6区分による情報の整理」：収集した情報（①）を自立活動の区分に即して整理する段階
段階②-2	「学習上又は生活上の困難」：収集した情報（①）を学習上又は生活上の困難や、これまでの学習状況の視点から整理する段階
段階②-3	「〇〇年後（卒業後）後の姿」：収集した情報（①）を〇〇年後の姿から整理する段階
段階③	「課題の抽出」：①をもとに②-1、②-2、②-3で整理した情報から課題を抽出する段階
段階④	「課題の関連の整理・中心課題」：③で整理した課題同士がどのように関連しているかを整理し、中心的な課題を導き出す段階
段階⑤	「指導目標」：④に基づき設定した指導目標を記す段階
段階⑥	「必要な項目の選定」：⑤を達成するために必要な項目を選定する段階（6区分27項目より選定）
段階⑦	「項目と項目の関連付け」：項目と項目を関連付ける際のポイント
段階⑧	「具体的な指導内容の設定」：具体的な指導内容を設定する段階 ※各段階の「 」内の表記は、本研究において「流れ図」の各段階を便宜上省略して表記したもの

## ⑤ 演習の様子

演習全体を通して活発な協議が行われた。特に、段階①「実態や情報」については、生徒の興味・関心やよさ、課題などについて数多くの意見が出された。そこから、段階②「6区分による整理」までは、各グループとも概ね順調に協議が進んだ。

段階③「学習上又は生活上の困難」の整理からは、グループによって協議が滞る様子も見られた一方で、活用経験者がいるグループは、その教師が協議を主導し検討を進めていた。

## ⑥ 「流れ図」を活用した協議の状況

演習時間内における流れ図を活用した協議の状況は表6のとおりであった。

表6 演習における「流れ図」を活用した協議の状況

- ・全グループで、段階③「課題の関連の整理・中心課題」までは協議を進めることができた。各グループの進行状況としては、段階④「課題の関連の整理・中心課題」、段階⑤「指導目標」までそれぞれグループが進み、もうグループは段階④～⑦を省略して段階⑧「具体的な指導内容」へ進んだ。
- ・段階①「実態や情報」では、学習面、社会性、興味関心について多く意見が出された。
- ・段階②-1「6区分による情報の整理」については、全てのグループで空白の区分があった。
- ・段階⑥「必要な項目の選定」、段階⑦「項目と項目と関連付け」は全グループ空白であった。

全てのグループで、生徒についての情報が多く出されており、日頃から一人一人の生徒に丁寧に関わっていることがうかがえた。一方で、その情報を自立活動6区分の視点で整理した結果、全てのグループで該当する情報がない空白の区分があった。

3グループのうち、2つのグループは段階に沿って概ね検討を進めるすることができたが、全ての段階を経た上で具体的な指導内容の設定に至ったグループはなかった。その要因としては、次の2つが考えられる。1つ目に、「流れ図」が全て未記入の状態から検討を行う時間としては短かった（約40分）ことが挙げられた。特に、協議においては段階①「実態や情報」に多くの時間が割かれていたため、予め担任等で段階①を記入しておく、より短時間で検討が可能になると考えられる。2つ目に、これまで学校として「流れ図」を導入していないことから、職員一人一人の活用経験が浅く、特に段階⑥や⑦について検討の難しさがあったと推察された。「流れ図」は、実態把握から具体的な指導内容の設定に至るプロセスが様式化されたものである。段階に沿って検討する経験を積むことで、自立活動の視点による実態把握や各項目に対して考察する力が高まり、結果として自立活動の指導の充実につながっていく。「流れ図」を初めて活用する教諭も3割（事後アンケートより）いたため、本研究を機会に「流れ図」の活用について機運が高まることを期待する。

## ⑦ 研修後のアンケート結果を踏まえた考察

「流れ図」活用の演習を終えて、受講した教師達に研修後のアンケートを実施した。11名中9名から回答を得た。

「『流れ図』を作成・活用することで期待できると感じたこと」（図7）では、「多面的な実態把握」が5名と最も多く、次いで「教科等との関連付け」「自立活動としての根拠の明確化」が4名であった。「個への支援の充実」と「指導の個別化」は、それぞれ2名、1名という結果であった。その要因として、今回の演習においては3グループ中2グループで具体的な指導内容の設定にまで至らなかったことが挙げられる。後述の特別支援教育班による検討においては、同じ

生徒たちを対象に複数の具体的指導内容を導き出すことができたことから、検討に必要なポイントを踏まえることで（詳細は次項(2)②を参照)、「個への支援の充実」と「指導の個別化」は十分可能であると考えられる。「流れ図」と個に応じた指導のつながりを実感するためには、十分な検討の上で具体的指導内容を導き出したという成功体験が必要であると推察される。

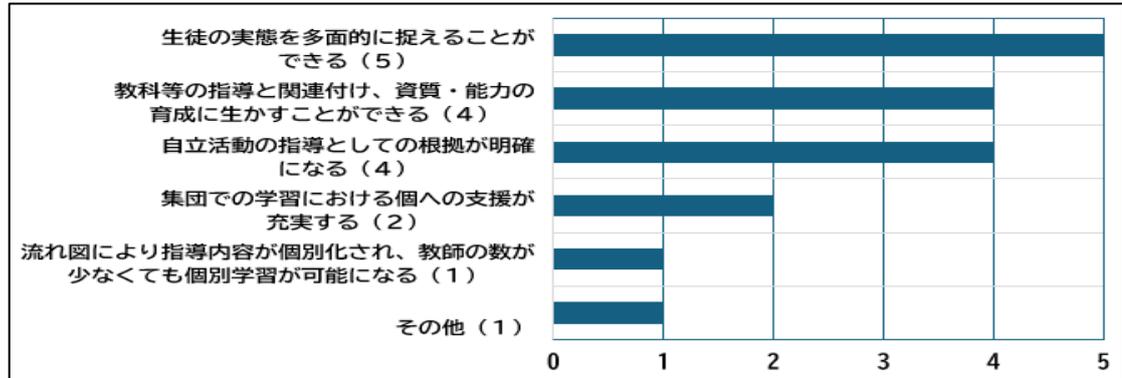


図7 「流れ図」を作成・活用することで期待できると感じたこと（複数回答）

「自校で『流れ図』作成を行うための効果的な工夫」（図8）としては、「夏季休業中など時間が確保しやすい時期の作成」が5名と最も多かった。それ以外の「入学年度におけるチームでの作成」「校内研修の一環として作成し素案として活用」「生徒と自立活動の視点（内容）を共有し生徒の考えや願いを反映」もそれぞれ3から4名の選択があった。「その他」を選択した人の具体的な記述では、「実態把握を終えてからの作成」「夏季休業中に担任が作成することが定着すると良い」等、設定項目と近い内容の回答があったほか、「AIの活用」等の意見があった。

選択肢のいずれの方法も、実際に演習を体験した先生方から一定の支持を得ているが、総合すると「一学期に実態把握を行い、夏季休業期間中に作成をする」ことが有効であると考えられる。ただし、一学期から授業は実施されるため、前年度までの資料を参考に授業を進めながら、並行して実態把握を行っていく必要がある。さらに、学校の実情に合わせた計画的な活用体制の整備や校内研修の活用、生徒参画型の授業づくりも効果的な工夫の一つになると推察された。

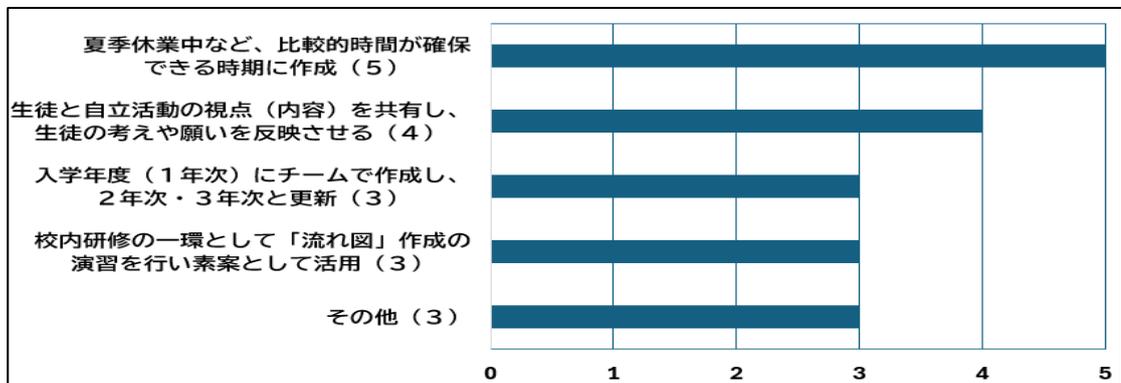


図8 自校で『流れ図』作成を行うための工夫として効果的であると思うこと（複数回答）

## (2) 特別支援教育班による追加検討

### ① 検討の概要

本研究においては、軽度知的障害に対する事例の蓄積を図るため、県立中部農林高等支援学校の校内研修を通して作成した「流れ図」について、特別支援教育班の主事4名で追加検討を行った。対象として、教師たちが「流れ図」を作成した3名の生徒のうち、検証授業においてワークシートに自己分析の記述のあった2名を抽出した。対象の2名については、各主事が検証授業等で複数回（2から7回程度、主事により回数は異なる）の観察を行った生徒であり、ここでは、生徒Cの例（表7、表8）を示す。

表7は、段階②-1から段階⑤までについての検討内容（紙面の都合上、一部省略）である。段階①「実態や情報」及び②-1「6区分による情報の整理」までは、教師たちからの情報と生徒の考えであり、特別支援教育班による追加検討は段階②-3以降について行った。教師たちから見た実態を参考に「学習上又は生活上の困難」の背景や「〇〇年後（卒業後）の姿」をイメージ

し、課題を抽出・整理して、新たな指導目標を追加した。

教師たちが挙げた実態や課題について、生徒の自己分析も参考にその背景を推察し、課題の関連を整理して、「自信をつける体験」という中心課題（段階④）を導き出した。「自信をつける」ために必要な項目を選定する際は、本人がワークシートに記述した「きんちょうする」「環(5)〈概念の形成〉、コミュ(3)〈言語の形成と活用〉が自分に必要だと思った」等（段階②-1）を参考にすることで、段階⑥以降において対象生徒に必要なアプローチを導き出すことができた。

表7 特別支援教育班による学校作成分（段階①～段階⑤）への追記 ※一部抜粋

段階②-1「6区分による情報の整理」（個人情報保護の観点から一部のみ抜粋）					
健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
生：ねるのがおそい	教：素直、しっかり話を聞く 教：まじめで一生意気 教：表情が暗いことが多い 生：きんちょうする	教：集団への参加に関すること	教：漢字の読み書きが苦手 生：(5)「基本的な知識や物事の性質の理解」が自分に必要だと感じた	※教師、生徒とも記載なし	教：言葉づかいが丁寧 教：文章表現が苦手 教：声が小さい 教：自分のことをうまく伝えられない 生：(3)「言葉の概念を形成し活用していく力」が必要
段階②-2「学習上又は生活上の困難」					
教師	○素直に人の話を聞けるが、自分の気持ちや考えを他者に伝える力が弱い ○書くことへのコンプレックスを少し軽減できたらいい				
段階④「課題の関連の整理・中心課題」					
教師	○自分の気持ちをきちんとつたえられるようになれば自信が出てきて声も大きくなるだろう		教セ	・自信がないのは、成功体験が少なく失敗をととても恐れている、周囲の目を気にしているのでは ・文章表現の苦手さは漢字の読み書きの苦手さに、自分の気持ちを伝えられないのは気持ちを言語化することの苦手さに起因している可能性がある。 ・自信をつける体験（肯定的な自己理解、スモールステップによる目標達成など）が必要である。	
段階⑤「指導目標」					
教師	○自分の気持ちを他者にきちんと伝える		教セ	・できることからスモールステップで成功体験を積み、自信につなげる	

〔生：生徒の自己分析による記述 教・教師：教師たちによる検討結果 教セ：特別支援教育班による追加検討結果〕

表8は、教師たちから記入のなかった段階⑥～段階⑧について、特別支援教育班で追加検討を行い、指導仮説を立てた。段階⑥「必要な項目の選定」については、生徒が「自分に必要な学習」と捉えた項目も参考にし、段階⑦「項目と項目の関連付け」の検討を経て、段階⑧「具体的指導内容」を複数導き出すことができた。「流れ図」の活用によって一つ一つの指導内容が的確に意味付けされたことで、それぞれの指導内容を効果的に関連付けることも可能になったと考えられる。考慮した点として、教師への事前調査等で複数の個別教材の準備に対する負担感を訴える声もあったため、ここでは、特別な教材を必要とせずすぐに取り組める指導内容を設定した。

表8 特別支援教育班による「流れ図」の段階⑥～段階⑧の検討

段階⑥「必要な項目の選定」		※網掛けは生徒と教セ(特別支援教育班)で選定が一致している項目																									
区分	健康の保持					心理的な安定			人間関係の形成				環境の把握					身体の動き					コミュニケーション				
項目	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
生徒	○						○		○		○						○										○
教セ	○			○			○	○			○						○	実態未記入のため選定不可							○		○
段階⑦「項目と項目の関連付け」																											
〈体調管理の大切さに気付き実際に行動できるように〉健(1)・環(4)を関連付けてア 〈達成感・成就感を味わい成功体験を積めるように〉心(3)・環(5)・コ(3)を関連付けてイ 〈他者とのコミュニケーションに慣れるために〉心(2)・コ(5)を関連付けてウ 〈読み書きの基礎となる力を養い、文字による意思表示力の向上やコンプレックスの軽減のために〉心(3)・環(4)を関連付けてエ 〈わからない文字や言葉、事柄を自分で調べることができるように〉健(4)・心(3)・人(3)を関連付けてオ																											
段階⑧「具体的な指導内容の設定」																											
※まずは自信をつけて自己表現の力を高める。コミュニケーションスキルはその後。スモールステップでの取り組みが重要。 ア 一日の生活チェックカード（本人が理解しやすい様式）を作り、その日の行動や気分を記入して、毎日振り返る。また、生活習慣に必要な情報を携帯情報端末等で調べたり、体育の先生や養護教諭から助言をもらいに行ったりする。 イ 自分で決めた目標を一定期間行い達成する。本人が取り組めそうなことを決め、小さな成功体験を積み重ねる（好きなこと、チャレンジしたいこと、人の役に立つこと等）。他の指導内容とも関連付けて成功体験を積む。 ウ あらゆる場面で多様な人と言葉を交わす練習をする。特設の時間に自然な形で組み込むなど、スモールステップで行う。 エ 自分に合う読み書きの学び方を探す。 ※「読み書きサポートブック（教育センター）」の活用、教科との関連付け オ 携帯情報端末等の文字入力機能や辞書機能、読み上げ機能の使い方を学ぶ。																											

## ② 軽度知的障害児の「流れ図」をより効果的に活用するポイント（追加検討を通じた考察）

特別支援教育班による検討の結果、軽度知的障害児の「流れ図」をより効果的に活用するポイントとして、以下の4点が挙げられた。

## ア 表面上の課題の背景について多面的に探る

演習を通して教師たちが挙げた実態を参考に、課題の背景について新たに複数の要因を推察し、その課題同士の関連を整理することで、中心課題と指導目標を追加した。生徒の日々の様子は、様々な要因が絡み合っている表面化している課題である。生徒一人一人の状況を自立活動の視点で満遍なく把握し、その背景を多面的に探っていくこと、また、複数の教師で検討していくことで、生徒が抱える困難の背景や中心課題に迫ることができると考えられる。

## イ 生徒本人の意見や考えを参考にする

本研究においては、生徒参画型教材を試用し、生徒たち自身が自己の課題について考える学習を行った。表7の例となっている生徒は、6区分中5区分において自己に必要な学習項目を選択しコメントも記述した。これらの中には、教師たちから挙がらなかった内容もあり、「流れ図」作成の過程において大いに参考となった。特に、項目②-2「学習上又は生活上の困難」の背景を分析する際に、貴重な手がかりとなった。教材は、生徒本人の思いを引き出し多面的な自己理解を促すとともに、教師が気付かない部分を明らかにする役割も果たすと考えられる。

これらのことから、生徒本人の考えなどを参考にすることや、生徒自身も指導の計画や改善に参画していくことは、軽度知的障害児に対する自立活動の充実にとって有効な手立てであると考えられる。一方で、課題のみに着目するのではなく、生徒の強みや長所を伸ばしたり、そのことを実感できる場を設けたりして、肯定的な自己理解を促していく視点も不可欠である

## ウ 『指導要領解説』の例示を参考にする

演習において、全てのグループで段階⑥・⑦が未記入であった。段階⑥・⑦を検討するためには全27項目についての十分な理解が必要なため、『指導要領解説』の活用が奨励される。特別支援教育班による追加検討においても、『指導要領解説』に示される各項目の内容及び第7章「自立活動の個別の指導計画の作成と内容の取扱い」に示される「流れ図」の作成例を参考に、項目間の関連付けと具体的指導内容の設定を行った。

教師への事前調査等においては、軽度知的障害児の自立活動について具体的なイメージをもちづらという声があったが、本研究のように、指導に至る手続きを着実に踏まえ、指導要領解説の例示を参考にすることで、個に応じた具体的指導内容の設定は十分可能である。

## エ 学校の実施体制を整える

自立活動の指導は障害のある児童生徒の調和的発達のための基盤を培うものであり、特別支援教育の要となる指導領域である。令和6年度特別支援教育教育課程等研究協議会<sup>2)</sup>（以下、教育課程等研究協議会）においては、自立活動の指導は「実態把握から指導目標を設定するまでのプロセスが最も重要である」と改めて確認された。県内での事例が少ない高支の生徒を対象に、このプロセスとして例示されている「流れ図」を活用できたことは、今後の自立活動の充実に向けた貴重な一歩であると言える。

一方で、実際の指導に至るためには丁寧な手続きが不可欠であるため、各学校においては、学校教育活動や校務全体のバランスを考慮した自立活動の実施体制を整えることが求められる。実施体制の整備にあたっては、校内におけるファシリテーターを位置付けることで、効果的なPDCAサイクルの構築や教師の資質向上に寄与するものと考えられる。

## (3) 「流れ図」を活用した指導

当初の予定では、夏季休業期間中に流れ図を活用して具体的指導内容を設定し、2学期からの授業に反映させる予定であったが、学校の日程の都合上、本研究の期間内における指導内容の実践には至らなかった。演習で作成した「流れ図」は、協力員の教科の授業において活動設定の参考にするなど、一部活用を図ることができた。特別支援教育班で追加検討した「流れ図」については、協力員を通して参考資料として提供した。本研究で得られた成果とともに、今後の自立活動の指導における活用に期待したい。

<sup>2)</sup>文部科学初等中等教育局・菅野和彦視学官の講義資料及び説明より。

### Ⅲ まとめ

#### 1 生徒参画型の教材について

生徒参画型教材を活用した授業実践及び生徒への事後アンケートを通し、活用の効果と改善点について検証することができた。教材を活用することで、生徒が自己理解を深め、自己決定や自己選択を通した生徒参画による主体的な学びにつながることを期待された。一方で、生徒への事後アンケート等も踏まえ、よりわかりやすい教材を目指して改善を図る必要がある。併せて、指導計画や指導案の例示並びに教材・動画等の分量の工夫等、教師の効果的な活用を促す改善も図っていく。

また、本教材の活用を通して引き出される生徒自身の考えは、「流れ図」作成の参考や生徒参画の土台となることも期待された。特に、高支における自立活動においては、教材を介して生徒と対話を深め、ともに課題設定や評価を行っていくことで、より一層の指導の充実が期待される。

#### 2 「流れ図」の活用について

本研究を通して、自立活動の「流れ図」の活用により軽度知的障害児の多面的な実態把握や個に応じた指導の充実が可能になることが示された。一方で、検討に一定の時間を要するため、活用に当たっては、校務全体のバランスを考慮した実施体制を整えることやファシリテーターの位置付け、生徒の意見や考えを参考にすること等が必要であると考察された。本研究においては、今回の実践やアンケート調査等を踏まえた「流れ図」活用サイクルの一例（図9）を示す。

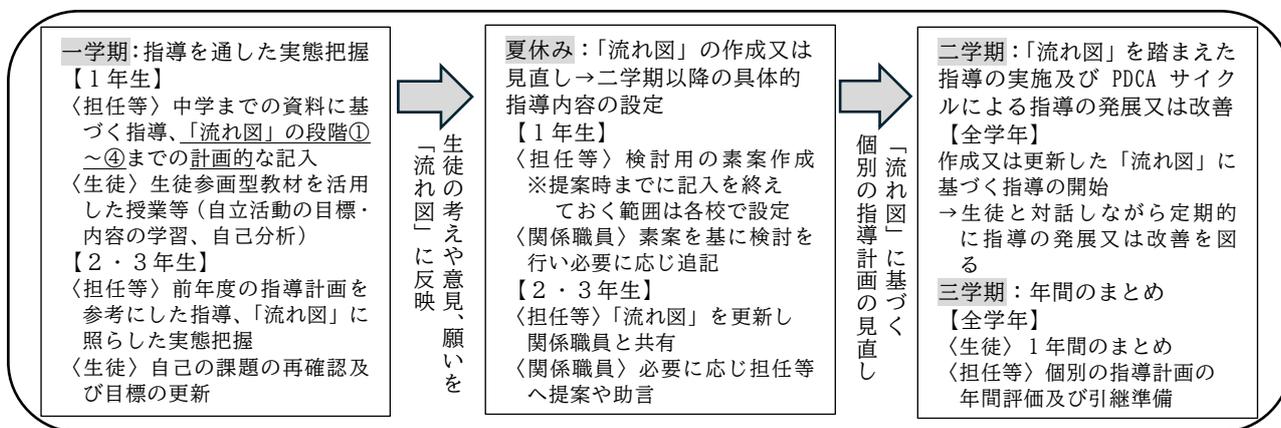


図9 「流れ図」活用サイクルの一例

#### 3 今後の展望について

本研究の結果、生徒参画型教材並びに自立活動の「流れ図」を活用することで、軽度知的障害児に対する自立活動の具体的指導内容を導き出すことができた。一方で、実際の自立活動の指導への活用については、今後の課題となった。教育課程等研究協議会でも確認されているとおり、自立活動の指導の要となるのは「特設の時間（時間割上のコマの時間）の指導」である。特設の時間における個に応じた指導の充実を図ることで、学校教育活動全体における自立活動の指導も充実する。このことを踏まえ、高支における自立活動の指導の更なる充実に向け、今後も研究を継続していく。

#### 〈参考文献〉

菅野和彦 2024 『令和6年度 特別支援教育教育課程等研究協議会 病弱・身体虚弱部会』資料  
 志鎌知弘 2021 『知的障害児に対する「自立活動の個別の指導計画」－本人参画型の作成・活用の効果－』山形大学大学院教育実践研究科年報第12号(2021)  
 中央教育審議会 2021 『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)』  
 志鎌知弘 2020 『知的障害児に対する「自立活動の個別の指導計画」－本人参画型の作成と活用－』山形大学大学院教育実践研究科年報第11号(2020)  
 三浦光哉 2020 『本人参画型の「自立活動の個別の指導計画」 理解度チェックと指導計画の様式』ジアース教育新社  
 下山直人監修 全国特別支援学校知的障害教育校長会編著 2018 『知的障害特別支援学校の自立活動の指導』ジアース教育新社  
 文部科学省 2018 『特別支援学校教育要領・学習指導要領 自立活動編(幼稚部・小学部・中学部)』